

子ども・青年社会学 2023

—子ども文化・青年文化の社会学—

講義予定

【講義概要】現代社会において多様な広がりを見せている子ども文化・青年文化を社会学的な視点から分析・考察し、それらを理解・解釈する視座を修得する。まず、近代に生まれた「子ども」へのまなざしが、どのような子ども向け文化を生み出していったかを歴史的に辿り、特に戦後日本における子ども文化のもつ社会的機能について検討する。次に、「青年」が**社会集団**として形成された1960年代以降の青年文化を取り上げて、そこに見られる諸要素（生産者としての青年、社会構造における青年の位置、青年の階層構造、消費者としての青年、文化産業など）を分析する。これらを通して、本講義で**〈子どもコード〉**と呼ぶものを明確にしていき、〈子どもコード〉が**〈コード化〉**によって生成されることを示す。これに対して、コード化されたものを無（**〈無コード〉**）に帰す運動、すなわち**〈脱コード化〉**の発生を示すが、これが子ども文化に対する青年文化であることが明らかにされる。このような脱コード化がいかに発生し、衰退していくのか、また脱コード化の衰退の過程で起きる**〈再コード化〉**について、青年文化の歴史の中で確認する。最後に、現代（2000年代以降）において子ども文化が被っている**〈過コード化〉**について指摘する。

【評価】定期試験100%により評価する。

1. 4/11 3限 「子ども」の表象はどのように生まれ、どのように維持されてきたのか？

「子ども」という表象が近代においてどのように生まれたのかを、ルソー『エミール』（1762）とフィリップ・アリエス『アンシャンレジーム期の子どもと家族生活』（1960）にもとづいて説明する。また、子どもの表象に随伴して出現した児童文学において、〈子どもコード〉と呼べるものが出現しながら、子どもという概念を強固にしていく過程を述べる。（「教育学概論」の復習）

【キーワード】ルソー『エミール』／アリエス『〈子供〉の誕生』／ペロー／グリム／児童文学

2. 4/11 4限 日本では子ども文化はどのように受け入れられたのか？

ヨーロッパから輸入された「子ども」という概念が、いかに日本に定着したのかを概観する。まず、明治期以前・明治初期の子ども向け文化について取り上げる。次に、「純粹で汚れない子ども」という表象が、どのようなメディアを通じて、大正期・昭和初期に広まっていったかを説明する。

【キーワード】御伽草子／桃太郎／巖谷小波／鈴木三重吉／『赤い鳥』／宮沢賢治

3. 4/18 3限 日本の子どもはどのように発展していったのか？

昭和期～戦後日本において、子ども文化は劇的に発展していった。その原動力となったのは、『赤い鳥』に

代表される子どもの高級文化ではなく、大衆的子ども文化であった。その発展の経緯をたどる。

【キーワード】 講談／立川文庫／『少年倶楽部』／江戸川乱歩／『少年』

4. 4/18 4限 子ども文化世界の中心をめぐる闘い

戦後日本において、子ども文化の中心を占めたものは何か。戦後、漫画雑誌が台頭するが、一方ではテレビの普及に伴い、子ども向けアニメが製作され、絶大な人気を博す。しかし、1980年代にはテレビゲームが生まれ、アニメも変質していく。少年漫画誌とテレビアニメ・特撮物の歴史をたどりながら、メディアの技術発展の背後で何が起きているのかを見ていく。

【キーワード】 『少年マガジン』／手塚治虫／『鉄腕アトム』／『少年ジャンプ』／ファミコン

5. 4/25 3限 〈子どもコード〉出現の瞬間

グリムにおいて、〈子どもコード〉が出現したのと同様のことが、日本の子ども向けテレビ番組でも起こっていたことを明らかにする。この回は、視覚的資料をもとに、その出現の瞬間を特定する。

6. 4/25 4限 〈コード〉とは何か、〈脱コード化〉とは何か

前回の資料をもとに、〈子どもコード〉について考察する。〈コード〉とはどのようなものであるかを検討すると、〈脱コード化〉という現象が対になって存在することがわかる。〈子どもコード〉を〈脱コード化〉するものが、青年文化であると考え、青年文化の特質がよりよく理解されることを示す。他方、青年文化が〈無コード〉性をめざすがために生み出されるジレンマについても述べる。

【キーワード】 〈子どもコード〉／〈コード〉／〈脱コード化〉／〈無コード〉

7. 5/2 3限 では「青年」はどのように生まれたのか？

もう子どもではなく、といってまだ大人でもない「青年」の誕生は、明らかに「子ども」の表象が生まれた後である。それがどのような社会変動を背景にしているか、またどのようなものとして青年が表象されたかについて説明する。

【キーワード】 高等遊民／ヴィネケン／ホール『青年期』／サリンジャー

8. 5/2 4限 〈^{ノ・コ・ド}無コード〉——青年文化の先駆者としてのモダニズム芸術——

青年文化の特徴を〈脱コード化〉として考えた場合、〈脱コード化〉を目標にした文化運動の存在が重要になってくる。1920年代、ヨーロッパに生まれた前衛的芸術運動、「モダニズム」である。これは、既存の芸術に課せられていた規則・規制(コード)を、ことごとく破壊しようとするものだった。しかし、といってモダニズム芸術の担い手が青年であった、というわけではないのである。青年文化の〈脱コード性〉の性質は、モダニズムがすでに展開されていたことになる。この回には、こうしたモダニズムを、美術・音楽・文学の領

域にわたって、視聴覚資料をもちいながら解説し、そこに現われる〈無コード〉性について理解する。

【キーワード】 無調／シェーンベルク／ダダ／デュシャン／ジョイス／カフカ

9. 5/9 3限 二つの対立する「青年」——1950年代後半～1960年代初めのアメリカ——

「若者」がいかにして「青年」なるのか？その発端は、1950年代後半から60年代の、とくにアメリカにおける二つの「青年」の対立にある。一方で、理想主義と反戦平和を掲げる大学生を中心とした青年層、他方で社会に不満をもちつつも、享樂的な生活を重視する白人労働者の若者。両者は、音楽的にもまったく別の指向性を持っていた。アメリカの時代状況をふまえながら、この時期の青年は、まだ分断された状態であることを、それぞれが担った文化を例に挙げながら説明していく。

【キーワード】 ギンズバーグ／カレッジ・フォーク／ジョン・パエズ／黒人音楽／R&B

10. 5/9 4限 対立する「青年」はどうしたら一つになれるのか？

精神的祖先であるモダニズムの継承者であり、大学生を中心としたインテリ青年層と、不満とエネルギーにあふれた白人労働者、黒人青年という両者の間には、共通の文化がありうるのか？二つの集団の統合に、音楽が大きな役割を果たしたこと、また、アメリカ国外の事情が関係していたことを、聴覚的資料を基に解説する。

【キーワード】 ロックンロール／ボブ・ディラン／ザ・ビートルズ／フォーク・ロック

11. 5/16 3限 ザ・ビートルズは1960年代を体現している

この回は、二つの青年の結合を生み出すことになったザ・ビートルズの功績について、聴覚資料をもとに説明する。それは、ザ・ビートルズの音楽的変遷が、1960年代の文化的変化と対応関係にあるからに他ならない。

12. 5/16 4限 社会を〈脱コード化〉する者たち

もはや二つに分断された青年集団ではなく、一つのカテゴリー（「青年」）を構成するようになった青年について、視覚資料をもとに説明する。その際、大きな役割を果たしたサイケデリックについても解説する。

【キーワード】 モンタレー・ポップ・フェスティバル／サイケデリック／ヒッピームーヴメント／LSD／ウッドストック

13. 5/23 3限 〈脱コード化〉が〈再コード化〉されていく

脱コード化をその本質としてきた青年文化は、1970年代以降、二つの問題（アポリア）に直面することとなった。一つは脱コード化自体のジレンマであり、もう一つは脱コード化自体を再コード化しようとする力の出現である。これによって、青年文化が苦しい往復運動を始めることになったことを、視聴覚資料をもとに解説する。

【キーワード】 〈再コード化〉／青年文化産業／産業ロック／パンク／ヒップホップ／ラップ

14. 5/23 4限 「おたく」と〈過コード化〉——現代における//子ども//と（青年）——

以上のような青年文化のダイナミズムは、戦後日本においては、フィルターがかかったようなぼんやりした形で実現されていった。このことを、戦後日本の青年文化史年表などを用いながら検討していく。その際、極めて高度に発達した日本の子供文化との関連が重要であることを述べる。他方、子ども向けの番組は、より子どもコードを意識するようになっていく。これを〈過コード化〉という概念を用いて検討し、現代日本の子ども文化と、脱コード化の矛盾を抱えた青年文化の現状を検討する。

【キーワード】 〈過コード化〉／低年齢アニメ

※授業の内容は、「青年と二重の差異化：脱コード化と再コード化の理論」(南山大学リポジトリ『アカデミア 人文・自然科学編』第24号)としてまとめている。

https://nanzan-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=4112&item_no=1&page_id=13&block_id=21